



1 日 前

に戻れたら…

私たち（被災者）からみなさんに伝えたいこと

いち にち まえ

『一日前プロジェクト』エピソード集

令和4年3月



内 閣 府

（ 防 災 担 当 ）



目次



I. 一日前プロジェクトの概要	1
II. 令和3年度実施要領	2
III. 「一日前プロジェクト」のエピソードについて	3
令和3年度「一日前プロジェクト」エピソード集	7
編集後記	
一日前プロジェクト、みんなでやってみませんか?	51

一日前プロジェクトの概要

■「一日前プロジェクト」とは？

「一日前プロジェクト」とは、被災から一定期間を経過した被災者・災害体験者のみなさまや災害対応経験者のみなさまにお集まりいただいて、「もし、災害の1日前にもどることができたら、あなたは何をしますか」をテーマに、

- ① 被災前後の行動
- ② 体験を通じて上手くいったと思うこと、失敗したと思うこと
- ③ もう一度災害が発生したならば、次はどのように行動したいか
- ④ そのために日頃から何を準備しておけばよかったか

といった本音の話をお聞かせいただき、これらの話から導き出されるさまざまな教訓や身につまされる体験をショートストーリー（エピソード）に取りまとめるという活動です。

こうして取りまとめたエピソードを広く活用・普及させることで、地域のコミュニティや国民一人ひとりに、防災・減災への関心や意識を高めていただくことを目的としています。

■「一日前プロジェクト」誕生の背景

わが国の経済を支える壮年層は、日々の仕事に追われ、防災教育を受講する機会や防災に関する情報に接することも少ないため、自然災害の恐ろしさを意識することなく日常生活を送っています。しかしながら、万一、大きな災害に見舞われた場合には、家屋の損壊や家族の死傷、仕事を含めた生活基盤の喪失など、経済的にも精神的にも甚大な損失を被ることが予想されています。

教育課程にある若年層の防災教育もまだ十分とは言えませんが、これら壮年層に対する防災教育の仕掛けづくりには若年層以上に難しい面があるといえます。地域のコミュニティや国民一人ひとりが日頃から災害に備えることを目的とする「災害被害を軽減する国民運動」の中心的な役割を果たすべき壮年層の災害に対する関心を呼び起こし、防災・減災に向けた行動や、災害への「備え」をうながすきっかけになるべく、一日前プロジェクトが誕生しました。

II

令和3年度実施要領

対象災害	ヒアリング地域	ヒアリング対象	ヒアリング実施時期
胆振東部地震・全道停電 平成30年北海道	北海道 西胆振地域	観光施設職員、ガイド、資料館館長	令和4年3月
		観光施設職員、ガイド、町役場職員	
		観光協会職員、ガイド、キャンプ場管理人、旅館経営者	
		宿泊施設支配人	
		学校教員、職員	
令和元年東日本台風	長野県長野市	住民(元住民自治協議会)	令和4年2～3月
		住民(元地区役員)	
		醸造場社長	
		ボランティア	
		社会福祉協議会職員	
		福祉施設職員、元病院事務長	
		バス会社取締役・社員	
		製造業取締役・社員	

Ⅲ

「一日前プロジェクト」の エピソードについて

「一日前プロジェクト」のエピソードは、国民一人ひとりが災害に備えることの大切さを自分の事として受け止め、それを行動に移すきっかけとしていただくためのエピソードであり、多様な場面での活用が期待されています。

「自分だったら」「我が家だったら」「我が社だったら」というように、自分の身の上に置きかえて読み進めてください。

また、最初から順番に読む必要はなく、年齢や性別、家庭や地域、職場などにおける役割など、自分と似かよった立場や境遇の方々のエピソードを拾い読みしたり、興味のあるタイトルにひかれて読んでみたりなど、自由に読み進めてください。

一つひとつの小さなエピソードから教訓などを感じてもらい、減災の大切さを知りきっかけとなれば幸いです。また、「おもしろい」と感じたエピソードは、ご家族、友人、ご近所、地域コミュニティ、職場の方々などへもご紹介ください。

令和3年度「一日前プロジェクト」エピソード一覧

災害 種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害	ページ
地震・停電	電池の腐食でラジオ使えずに情報収集できず	北海道 西胆振地域	家庭	平成30年北海道胆振東部地震・全道停電	9
	イタリアからLINEで夫とやり取り 「帰ってもしようがない」と言われ、ツアー続ける				10
	停電で信号止まり、ビクビク運転 噴火の避難用トンネルには明かり				11
	「北海道民生きているか」「大丈夫です」 スマホで延々と返信				12
	停電の朝に卵焼き、階段の車椅子も支援 同業者の旅館の対応に大変さ推察				13
	ネット情報に翻弄される 情報の信憑性をどう判断するのか				14
	台風と地震で長引く停電 どうしよう冷凍庫 身近な困りごとで数日				15
	娘の入院初日の夜に地震 非常用電源で医療機器が動き、停電でも温かい食事				16
	停電中にイタリア出張、眼下の北海道に特別な愛おしさ ＝空港には大勢の海外旅行客				17
	早く声をかければ良かった移住体験中の愛知からの老夫婦		地域・ご近所		18
	地震のあとは災害とつなげて洞爺湖をガイド		企業・職場		19
	温泉のポンプ復旧後 きれいなお湯になるまで大わらわ				20
	地震の前に台風で運休 地震後は食事にあぶれた修学旅行やインバウンドの団体に対応				21
	無我夢中でおにぎり握り、ラーメン作る				22
	観光協会幹部らが花火の打ち上げ決定 一生の思い出と感謝の声				23
	前日の台風でフロントに顧客データが印刷済み 厨房のお鍋に水も準備				24
	ロビーにホワイトボード持ち出し、英語や中国語でも情報提供				25
	延泊の料金は「ちょうだいしない」と社長判断 寮住まいのスタッフもホテルへ				26
	特別支援学級の児童と「トランプしようね」と電話で安心伝える				27
	パソコンが使えないとまったく仕事にならない				28
	地震は期末試験中 延期の電話通じずLINEで伝言 先生がスクラム組んで対応				29
	復旧すると思い修学旅行のガイドコースを下見 教員仲間へ2000年噴火時のアドバイス				30

令和3年度「一日前プロジェクト」エピソード一覧

災害 種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害	ページ
台風	災害前の出前講座が役に立った	長野県 長野市	家庭、 地域・ ご近所	令和元年東日本台風	31
	浸水時、機能しなくなった固定電話				32
	根拠を示さないと避難してもらえない				33
	100回空振りでも、101回目は助かるように				34
	備えなければ憂いあり				35
	家の階段を上がってくる水に啞然				36
	夜を徹して作業してくれたボランティアさんに感謝		地域・ ご近所		37
	在宅避難の方への支援の遅れ				38
	ピンクの伸びた腹巻 ～支援ゴミ～				39
	避難所の中に子ども達の居場所をつくる				40
	災害廃棄物の山が消え、地域の景色が変わる				41
	もう1度りんごをつくろう				42
	機能したボランティアのコミュニティマッチング				43
	垂直避難で苦労		企業・職場		44
	水害に遭うと、すべて廃棄				45
	車両を守って地域の交通を守る				46
	お客様に連休情報を伝えるのに一苦労				47
	自動ドアの鍵が開けられない				48
	データ管理は、事業継続のポイント				49
	「会社は大丈夫なの?」という不安を解消				50

令和3年度
「一日前プロジェクト」
エピソード集

電池の腐食でラジオ使えずに情報収集できず

80代 男性 資料館館長

有珠山の2度の噴火に立ち会ってる私は、変に地震慣れしていて、寝ていてもP波※を感じる体質なのです。「あ、何か起きるぞ」と目を覚ますと、S波※がドンときて、音もなく、ゆさゆさと揺れました。有珠山の火山性の地震なら、P波もS波もなく、足元からドカンと来るので、そうではないとすぐ気づきました。

「釧路か十勝か、どこかで相当な地震が起きたな」と思い、枕元のテレビをつけて震源の位置を確認すると、その一帯が樽前山の噴出物の堆積層なので、山崩れなどの被害が出るのではと心配になりました。その十数分後、被害の実態が分かる前に停電して、携帯ラジオを取り出したのですが、入れっぱなしにしていた電池が腐食していて、スイッチを入れても機能せず使えませんでした。うかつでした。

いつもなら、災害のニュースを全てビデオに収録しておき、後で参考にするのですが、停電でそれもできませんでした。電気が復旧して、ぱっと部屋が明るくなった時は全身、脱力でした。すぐ、テレビに飛びついたので、地震の情報は定時ニュースぐらいになってました。

※P波とS波:地中を伝わる速度が速く、最初に地表に到達する地震の波をラテン語で「最初」の「Primae」からP波、P波の次に到達する「第2の」を「Secundae」でS波と呼びます。S波によって地面は大きく揺れるので、P波を素早く解析してS波がくる前に地震の揺れに関する情報を伝えようとしているのが緊急地震速報です。
https://www.zisin.jp/faq/faq01_10.html (日本地震学会のWebサイトから要約)



イタリアからLINEで夫とやり取り 「帰ってもしようがない」と言われ、ツアー続ける

60代 女性 ガイド

地震が起きた時、私は、火山の国際会議に出席するため、イタリアにいました。夫からは、「地震でこういう状況になったよ」と携帯電話のLINEで連絡が入り、それを追いかけるように、東京に住む息子と、神奈川に住む娘からLINEが来ました。

離れて住む子ども達には、私がイタリアに行っていることを知らせていなかったで、「えっ!」と驚いてました。私は、あたふたしてしまっで、「帰った方が良いかな?」と夫に相談すると、「帰ってもしようがないからそのままいなさい」と言われ、帰国しませんでした。

ネットには、“本当かな?”という情報が飛び交っていたので、東日本大震災で帰宅難民も経験していた息子が心配して、同居していた母を「フェリーで避難させて」と言ってきたそうです。夫が息子と娘の三人で、どうしようかとLINEで話し合っで、「数日で落ち着くから」と、行かせないことに。夫は、キャンピングカーでスマホの充電もできまし、食料のストックもあったので、それほど切羽詰まった状況ではなかったんですね。

停電が収まってから帰国したのですが、「おかえりなさい」というだけで、苦勞話をされることはなく、母も別にどうってことないという顔をしてました。



停電で信号止まり、ビクビク運転 噴火の避難用トンネルには明かり

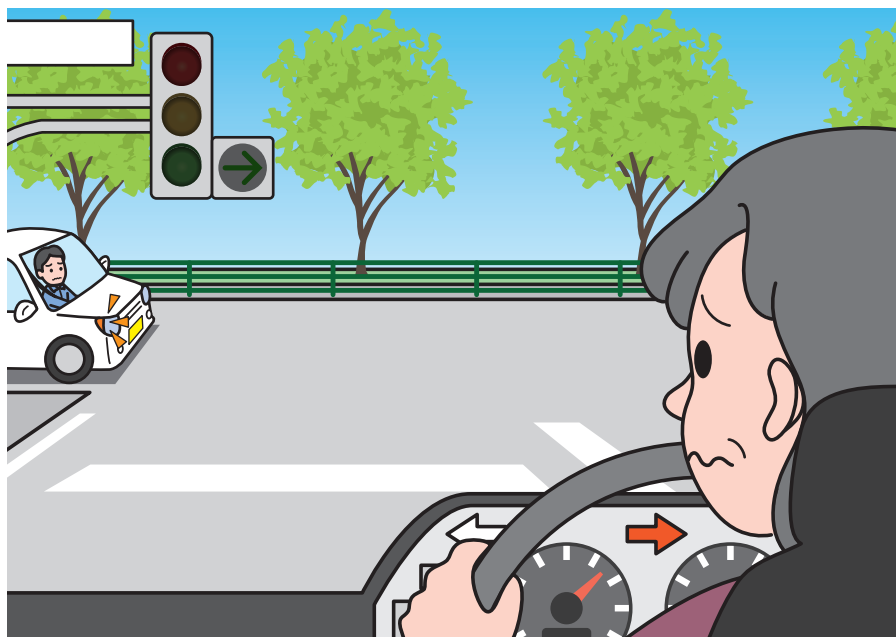
50代 女性 ガイド

地震が起きた午前3時、飛び起きて、飼い犬を抱えて、無意識のうちに玄関の扉を開けていました。テレビをつけて状況を確認していたら停電になったので、“朝起きたら電気がついているだろう”と考え、また寝ました。結局、翌朝も停電の状態が続いてました。

その日は、噴火湾で海外の方を案内するクルーズの予約が1件入っていました。地震で来られないのかなと思っていたけれど、クルーズに出るということで、朝の8時ごろ豊浦に向かって車を走らせました。

停電で信号が全部消えていたので、特に、T字路、十字路では、どう車を走らせたら良いのか、すごくビクビクしながら、走っていました。途中、有珠山の噴火が起きた時に避難路となるトンネルがあるのですが、その中の電気だけはこうこうと輝いてました。おそらく災害対策用の電気がついていたのだと思いますが、鮮明に覚えています。

うちは翌日の朝には電気がつきましたが、洞爺湖温泉も、道路1本挟んで、電気がついた、つかないがありました。すぐそこがついたから、うちもそろそろかなと思って、なかなかこちらがつかないということは随分あったと聞きました。胆振東部地震を経験して、電気の線の区画があることに、改めて気づかされました。



「北海道民生きているか」「大丈夫です」 スマホで延々と返信

20代 女性 元観光施設職員

未明に地震が起きた時は、スマホの緊急地震速報で起こされました。地盤が丈夫なところなので、この家がこれだけ揺れているのなら、他はもっと揺れていると思いながら、家族でリビングに集まってテレビをチェックして、状況を把握しようとしていたところで停電になりました。仏壇にあったろうそくを灯りにしながら、私は、ネットの友だちの対応に追われました。

「北海道民生きているか」に「大丈夫です」と、そのようなやり取りが1時間続きました。あまりに切りがなかったので、TwitterとLINEのプロフィールに「生きてます」と。スマホの充電が、受信するだけで勢いよく減っていったのを感じています。

寝る時、普段はスマホの電源をつけっぱなしですが、また、地震の情報が来るとまずいので、少しでも消費量を抑えておこうと、使わないアプリの動作を停止してから寝ました。電気が朝来ていたら良いなと思い、コンセントに充電器をさしておいたのですが、寝る前は70-80%だった充電が、朝起きたら30%ぐらいになっていました。「あ、だめだな」と思い、仕事へ行くまでの間、車で充電しました。



停電の朝に卵焼き、階段の車椅子も支援 同業者の旅館の対応に大変さ推察

60代 女性 旅館経営

その日は、久しぶりに海外から帰ってきた息子と私たち夫婦、父と叔母の5人で定山溪に泊まりに来ていました。ごちそうを食べ、「やっと帰ってきて良かったね」と言いながら寝たのですが、揺れで目が覚めました。後から定山溪の地盤がとても良いと分かったのですが、それほど大きな揺れは感じませんでした。家族がテレビを点けようとした時に、「テレビなんかつける必要ある?」と言ってしまったぐらい。テレビで大きな地震だったんだと思った途端に、停電になったけど、あんなことになるとは思わずにまた寝ました。

翌朝は炊事の音とか卵焼きの匂いとかが漂ってきて起きました。携帯で全道停電のニュースを見て、どうも大変なことになっていると気づきました。旅館を営む私は、いつもは朝食を出す側なので、電気が復旧しない状況で、宿泊客の朝食を用意する宿の人は大変だなと思っていました。叔母は車椅子なので、エレベーターが使えずあたふたしていると、旅館の方が何人も来て、階段で下に降ろしてくれました。朝食は、ほとんど真っ暗な中で食べました。

帰りの車の中で、ようやくラジオが聴けて、テレビを見ることができました。「全道停電！これは大変なことになった」と、急に現実が襲ってきました。息子はその日、書き換えたパスポートを受け取って飛行機に乗る予定で、どうするどうすると家族会議になりました。「不要不急」と言いますが、「要」で「急」の用事と災害が重なると、本当に大変でした。

帰ってきてからは、地元には珍しい7階建てのサービス付き高齢者住宅に住んでいる叔母は、エレベーターが動かず車椅子で生活ができないので、私が服を取ってきて、しばらく我が家で寝泊まりしていました。



ネット情報に翻弄される 情報の信憑性をどう判断するのか

50代 女性 ガイド

娘が東京にいますが、すぐにLINEで、「北海道ですごい大きな地震があったけど大丈夫?」と連絡をくれたので、「私たちは大丈夫よ」と返しました。

娘は東京で、ネット情報に翻弄されたみたいで、「こんな噂が出ているけど大丈夫?」とLINEも来ました。どんな噂だったのかというと、「すごく大きな地震で壊滅的」、「北海道全部が…」などの噂で、こちらから「『北海道全部』は、電気が消えただけ」というやり取りをした記憶があります。

やはり情報に翻弄されるというのは、娘も可哀そうだし、言われた私も、「そんな情報が出ているの?」と思ってしまいました。こういうことにしっかりしている地元の知り合いでも、LINEで「拡散お願いします」というライフラインの不確かな情報を、思わず家族に話してしまった、ということも聞きました。情報の信憑性をどういったところで判断するのか、すごく大切だなと感じました。

今、FMラジオにも携わっているので、次に災害が起きた時、有珠山の噴火が起きた時には、現地からきちんとした情報を、間違えのない情報を伝えていきたいと考えています。



台風と地震で長引く停電 どうしよう冷凍庫 身近な困りごとで数日

40代 女性 観光協会職員

地震前の台風21号で、住んでいるところがしばらく停電になっていました。漁師をしている当時の彼氏（今の夫）からもらったホタテなどの魚介を冷凍していたので、長い停電で「ヤバイな」と思っていました。その停電が復旧したところで地震でした。

公営住宅の2階に住んでいたのですが、それなりに揺れたので、「津波が来るかもしれない」と思い、愛犬のチワワとどうやって逃げようかと考えました。車で避難しようとした矢先、津波の心配がないことが分かり、停電で真っ暗な中、やることもないので、犬と一緒にもう一回寝ました。

翌日に旅行会社を招聘するモニターツアーが入っていたので、職場に行かざるを得なくて、そこで厚真での被害に気づきました。定時で家に帰ると暗くなるので早帰りしたのですが、住んでいるところは停電だけでなく、携帯の電波も入らなくなっていて、何の情報も得られませんでした。

海のそばに行くと電波を拾える場所があり、そこにみんなが集まってスマホを使っていました。発電機を持っている漁師さんの家は、何軒か明かりが付いていて、“いいなあ、あそこ発電機があるんだ”と思っていました。

冷凍庫はなるべく開けないようにしていたので、カチカチに凍っていたものは何とかなるかなと思っていましたが、アイスは溶けていました。台風の後、地震でまた停電になり、本当に腹が立ちました。

厚真の方には申し訳ないのですが、その被害について考える余裕がないくらい、冷凍庫の心配、身近な困りごとでの数日を過ごしていました。



娘の入院初日の夜に地震 非常用電源で医療機器が動き、停電でも温かい食事

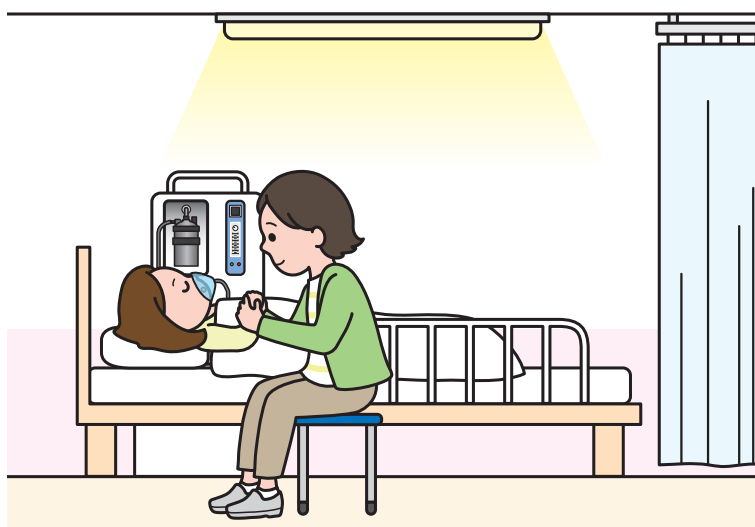
40代 女性 ガイド

地震の前日は、小学生の息子と幼稚園の娘の喘息を診てもらうため、予約していた病院に行ったところ、娘はそのまま入院になってしまいました。夫に連絡を取って息子を連れて帰ってもらい、私は付き添いとして一緒に寝ていた病院で地震に遭いました。

私は静岡出身で、子どもの頃から地震が来ると言われて育ち、阪神・淡路大震災の時には大阪の北部で強い揺れを経験していたので、古い病院の建物が万が一崩れたら娘をどうやって助けようかと考えてしまいました。スマホで確認すると震度4。娘も起きませんでしたし、これなら大丈夫かなと、ほっとしてまた寝てしまいました。

娘は24時間、酸素吸入器を付け、血中酸素濃度をずっと測っている状態でした。医療機器は止まることなく動いていたので、停電に気づいていませんでした。ただ、看護師さんたちが延長コードを持ってきたり、バタバタしていた時があって、後から思えば非常用電源を用意していたのではないかと思います。

テレビも見えていなかったなので、朝7時過ぎに友達からのLINEで、全道停電や大きな被害を知りました。病院では、ちょっとメニューは変わりましたが、地震の後も温かい食事が用意され、病院には感謝しかありません。



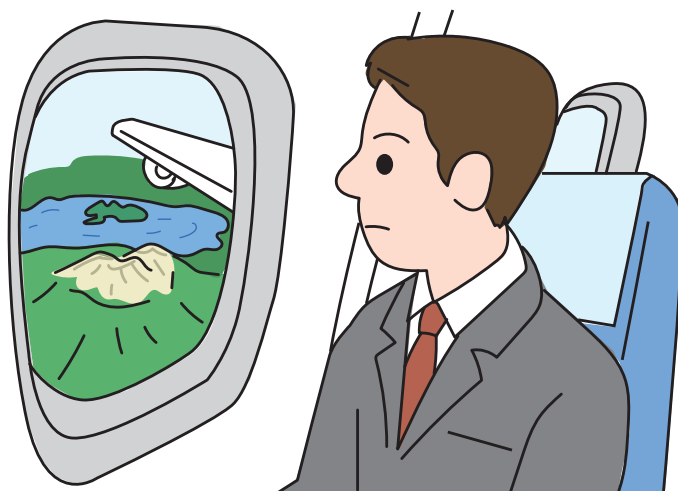
停電中にイタリア出張、眼下の北海道に特別な愛おしさ=空港には大勢の海外旅行客

40代 男性 町役場職員

国際会議に参加するため、地震の2日後にイタリアに行く予定でした。町内の被害は大きくなかったので予定通り出張に行くことになり、地震翌日に飛行機も飛ぶことを確認しました。空港に着くと、地震後に初めて国際線が飛ぶという日だったので、外国から来られた人がたくさんいました。

空港には、お湯を入れられるポットが並んでいました。中国の方は、保温ポットにお湯を常備される方が多いので、準備がいいなと思いました。お店はほぼシャッターが降りている中、小さなキオスクが空いていて、そこに長蛇の列。せめてもの北海道土産と思ってか、おつまみのような物を買っていて、気の毒だなあと思って見ていました。

離陸後、上空からきれいな洞爺湖や有珠山が見えました。きれいな洞爺湖を上空から見ながら、災害に遭った人は大変だろうな、地域で、全北海道で、みんながんばっているんだなと、いつもと違う地域への愛情が湧き上がりました。



早く声をかければ良かった移住体験中の 愛知からの老夫婦

40代 女性 ガイド

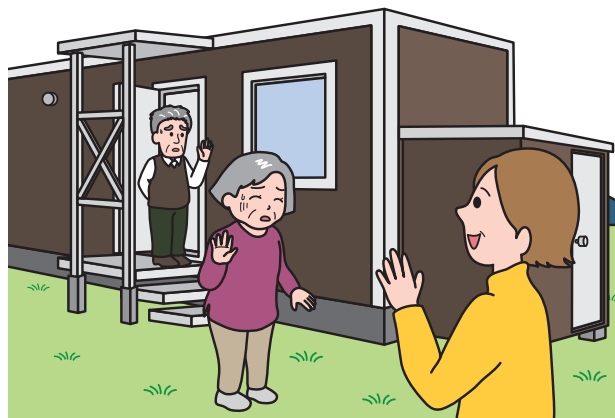
10代の時に兵庫県伊丹市で阪神大震災の地震を経験し、防災にも関心があったので、地震のあった年は「洞爺湖有珠火山マイスター」を目指して勉強中で、改めて防災意識が高まっていた時期でした。

地震のあった夜は、防災アプリのアラームで飛び起き、テレビで情報を見ていたら10分ぐらいで停電。役場に勤めている主人は、準備して役場に出たのですが、私は自分のFacebookへのんきに停電の投稿をして、その後、また寝ました。水や食料が結構ありましたし、電池やろうそくも備蓄していて、山登りで使うヘッドランプを使ってご飯の用意をしたりしていました。買い物で並んでいたら、役場の人が出てきて「電気は2-3日ダメかもしれないが、停電で水は断水しない」と伝えてくれましたし、大丈夫だろうと思っていました。夜は暗かったので星がきれい、キャンドルを灯してご飯を食べ、窓の外を見て寝る。キャンプみたいで、その日は楽しく過ごした感じでした。

うちの向かいに、町が生活備品を備えた移住体験住宅があるのですが、翌日になってそこに老夫婦がいたことに気づきました。まだ電気が復旧する前だったので、冷凍庫にたくさんあった特産の帆立が傷む前に食べてもらおうと、それを持って訪問してみました。愛知県から来た方で、この地を満喫したかったのだと思いますが、どこにも出かけられないでコンテナハウスのような住宅に籠もっていたためか、奥さんがテレビを見て、泣いておられました。

老夫婦で、スマホも使い慣れてなくて、情報を持ってもらえませんでした。うちの向かいなのに、もっと早く声をかけてあげれば良かったと後悔しました。

(参考=洞爺湖有珠火山マイスター http://volcano-meister.jp/?page_id=6)



地震のあとは災害とつなげて洞爺湖をガイド

40代 男性 自然ガイド

私は洞爺湖でのカヌーやトレッキングのアウトドアガイドと、野生動物調査の仕事をしているのですが、地震の夜は環境アセスメントに使う鳥類調査のため、山の中で寝ていて、地震に気づきませんでした。スマホの着信履歴で家族からの連絡を知り、地震があったというので、「水をためておけ」と言ったのを覚えています。アウトドアを仕事にしているので、キャンプ用品が家に色いろとあり、そこまで心配はしていませんでした。

朝、車で20-30分のコンビニへ食事を買いに行ったら、電源が落ちていたぐらいで、買い物はできました。当日も調査を続け、翌日、信号があまりない裏道で家に帰ってきました。家に帰り、家族からは「停電が不便」と言われたぐらいでした。

帰った翌日にカヌーガイドの仕事が入っていましたが、停電でお客様の宿泊場所もなくてキャンセルとなり、仕事が再開したのは、1週間後ぐらいでした。

その間、テレビで震源地周辺の地すべり被害を見て、自分の住んでいる洞爺湖周辺が火砕流台地という地形であることをより意識するようになりました。得意分野は鳥などの生物なので、あまり災害の話はしてこなかったのですが、ガイドの仕事を再開したあとは、洞爺湖の地形の特徴や火山災害の話などを話す機会が多くなりました。



温泉のポンプ復旧後 きれいなお湯になるまで大わらわ

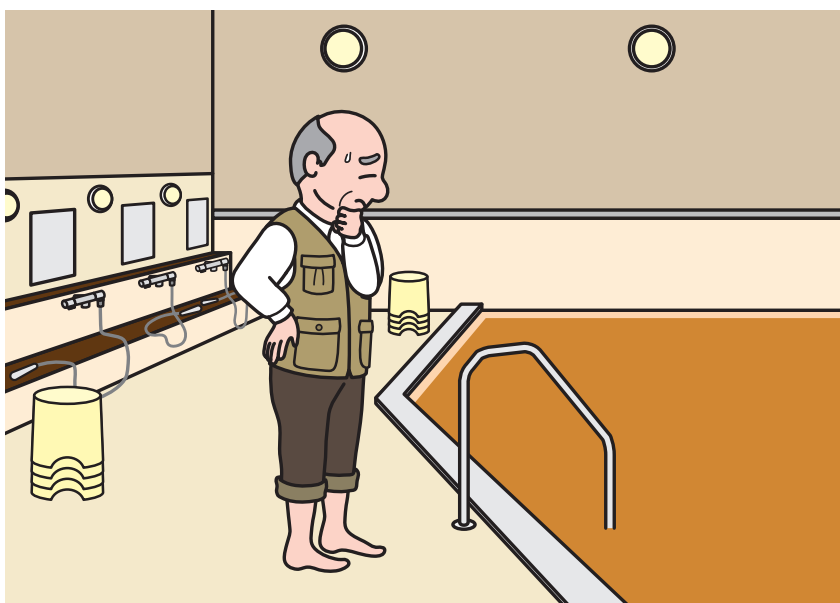
70代 男性 キャンプ場管理人

地震で起きてテレビをつけたのですが、たいしたことがないとすぐに寝て、キャンプ場に行くため5時半ごろに起きました。電気がつかなかったので、停電だとわかりましたが、そのまま職場に向かいました。

キャンプ場も停電していなければいいなと思っていましたが、ダメでした。停電になって温泉を揚げているポンプが一回止まってしまうと、お湯の色が真っ赤になって、とんでもない目にあうので、「いやぁ、参ったな」という感じでした。

電気が戻ると、お湯が浴槽に自動で汲み上がってくるのですが、最初は汚いお湯が出てくるので、浴槽の栓を開けっぱなしにして、お湯を何時間も流すわけです。お湯を貯めてみて、赤かったらまた抜くというように、お湯を繰り返していました。

キャンプ場の温泉は温度が低いので、熱交換器を使って加熱しており、その作動状況も心配で目が離せませんでした。



地震の前に台風で運休 地震後は食事にあぶれた修学旅行やインバウンドの団体に対応

40代 男性 観光施設職員

地震1日前の未明に北海道の西を北上した台風21号の強風で、ロープウェイを動かすための電線が切れてしまったので、地震前日から職場は非常事態でした。旅行会社さんや予約客などに「こういう状況なので、申し訳ありませんが、今日は営業できません」と伝えていました。5日中に電線を復旧しようと業者を手配しましたが難しく、地震当日の6日もロープウェイは休業することを決め、団体客などにはお断りの連絡を入れてました。修学旅行も多いし、海外のお客さんや国内ツアーもあって、それなりのボリュームはあったと思います。

ところが地震後、うちに食事場所を抱えているのを知っている旅行会社の知り合いから、午前中に「250名の修学旅行の団体が、予約していた場所で食事がとれなくなってしまったので、どうにかならないか」という電話が入りました。その人数はうちのレストランでは手配できないので難しいと断ったら、「お弁当でもなんでも良いので、食べるものが欲しい」と言われたんです。食材の都合もあったので、お握りに唐揚げをつけたお弁当を急いで作って、お昼前後にピックアップしに来てもらいました。韓国の20-30人のインバウンドの団体さんも、食事にあぶれたのでと飛び込みで注文が入ったりもしました。

水道とプロパンガスはありましたが、食材は冷凍ストッカーに入れていたものが多少もつので、対応できていたと思います。



無我夢中でおにぎり握り、ラーメン作る

20代 女性 元観光施設職員

私はロープウェイに乗って案内をする乗務員だったのですが、地震の前日の台風でロープウェイのための電線が切れたので、運休が決まっていた。未明の地震の朝、わりといつも通りに起きて、朝一で職場に確認したら、「念のために来て」ということで、出勤しました。仕事だと言われた時には、正直何をするのか分かっていませんでした。

職場にはレストランもあるのですが、そこでひたすら、おにぎりを握ることになったのです。おにぎりを握っている時は、数も多く無我夢中だったのですが、こんなに握る日があるのかと思いました。おにぎりを配ったあとは、ひたすら皿を洗いました。2日目も仕事に行って、ラーメンのお店も開けていたので、バスの運転手、添乗員向けに、ラーメンを作っていました。

ロープウェイの電力も戻って職場に復帰したら、ツアー中に旅行先の再開を待っていた人たちが一気に来たのですが、北海道が全部ダメという印象が強かったようでお客様がまた減りました。でも、その後は「元気で北海道」キャンペーンのおかげで、うちは結構、助かりました。

率直に、冬じゃなくて良かったと思いました。気温が下がるところなので、停電でストーブが点かないと生死に関わります。



観光協会幹部らが花火の打ち上げ決定 一生の思い出と感謝の声

40代 女性 観光協会職員

私は、温泉のバスターミナルにある観光協会の窓口で働いているのですが、停電後の朝も、いつもと同じくらいバスターミナルは観光客で溢れかえっていました。日常茶飯事の光景なので、地震の影響とは思えなかったのですが、実際は違ったのです。インバウンドで来られた方が、次の目的地に行きたいがどうしたらいいかなど、次から次へと相談に来ました。JRも高速バスも運休でした。日本語が分からないばかりで、一人ひとりへの案内を私一人でするにはどうしようもない状態でした。

そんな中で、観光協会に各ホテルの支配人が自発的に集まってきて、「連泊する人もいるんだけど、停電中で、食事をどうしようか」、「連泊をする人からは、お金は取れないよね」、「どこか受け入れ先はありますか？」などと課題を話し合っ、「今できることをやりましょう」と、パパッと午前中に対応方針が決まっていきました。

洞爺湖では毎夜20時45分から約20分間、花火を打ち上げているのですが、観光協会の会長もいるときに花火屋さんも来て、花火をどうするかという話になりました。

そうしたら、「やらない理由がまず見当たらない」、「上げましょう」と、5分くらいで実施が決まりました。その時私は、心の中で“花火は中止だよ、花火よりこの外国人の方々をどうするかだよ”としか考えていませんでした。

花火が打ち上がった後、すぐにYahoo!のトップニュースで報道されました。コメント欄には、停電で足止めとなった宿泊客の人が肯定的に書いてくれていました。肯定的なコメントばかりで、否定的なコメントはほぼなかったの、びっくりしました。

翌日、観光協会の窓口にいたら、お客様から「何もなかったし、明かりもなかったけど、花火は本当にきれいだった」、「こんな風に見られることってないから、貴重な経験をしたよ、ありがとう」、「一生の思い出になった」などと声をかけられました。

皆さんに喜んでもらいたいと、日本がこんないいところだったと思って帰って欲しいと毎日仕事をしていたのに、花火はやらない方がいいと思った自分は何だったんだろうと思いました。即決で花火を打ち上げるという判断に間違いはなかった。温泉に住んでいる人は、すごい方たちです。私は、観光に携わっていて本当に良かったなと思いました。



前日の台風でフロントに 顧客データが印刷済み 厨房のお鍋に水も準備

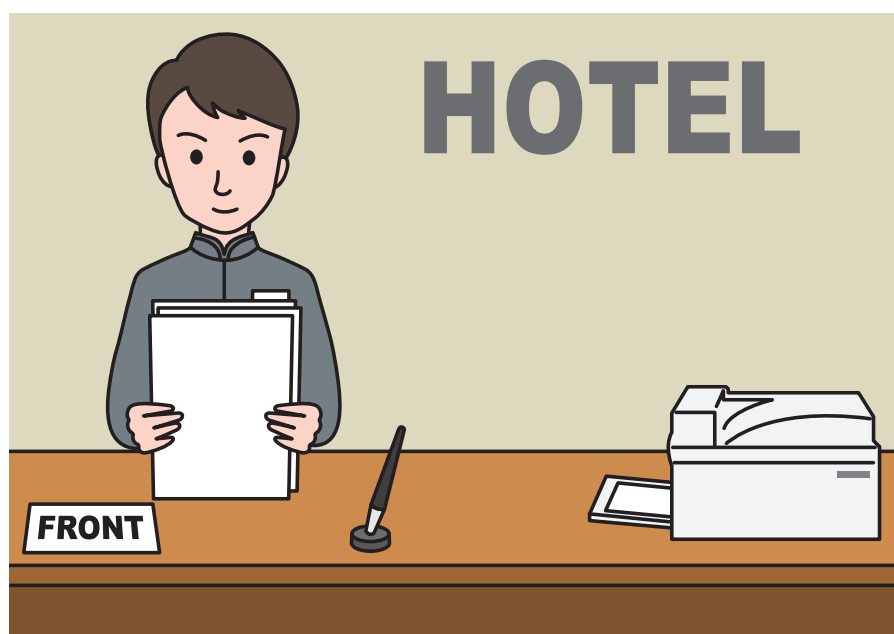
30代 男性 宿泊施設支配人

ホテルがある場所は、台風や大雨で停電することが多い地域です。ちょうど地震の前日は台風21号が来ていましたので、停電でパソコンが使えなくなった時に困らないよう、地震の翌々日までのチェックアウトのお客様の情報を、前日にフロントでプリントアウトしてありました。そのため、地震後に停電しても、チェックアウトなどの手続きをスムーズに済ませることができました。

また、前日に点検してあったカセットボンベ式の非常発電機を、ロビーと2階に設置し、スマホにつなげる充電器をたくさん付けて、お客様が代わる代わる充電できるようにしました。数年前の台風の大雨の時にお客様からリクエストがあったので、準備ができていました。

電気が通らないと水が出ないことは分かっていたので、前日から寸胴鍋などに大量の水をためてありました。朝食は、それを使ってできる範囲で提供しました。

地震が9月だったから良かったものの、冬の時期だと寒さ対策には対応できないので、これから考えていかなければと気づかされました。



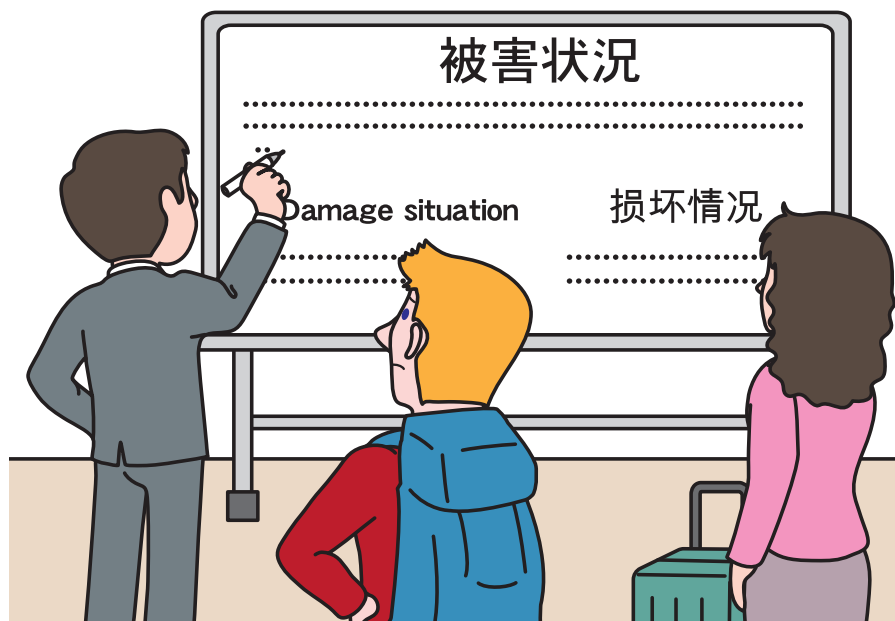
ロビーにホワイトボード持ち出し、 英語や中国語でも情報提供

40代 男性 宿泊施設支配人

地震のあった翌朝は、1階ロビーのフロント横にホワイトボードを設置して、被害状況などを日本語と英語、中国語で書き込んで、宿泊客へ情報提供しました。周囲には、大雨で通行止めになりやすい道もあり、お客様に情報を提供するため、普段からすぐ出せるようにしていたんです。

地震で停電していることや、朝食のこと、チェックアウトの精算の説明も書いていきました。地震の被害状況は、SNSで情報収集し、お客様から教えてもらった情報も加えて、記入していきました。停電の見通しについては、電力会社のホームページをスマホで見て、復旧の目途を確認して書いていました。

でも、地震当日の夜、スマホの電波が届かなくなっていました。あとから分かったのですが、この地域の携帯電話の基地局のバッテリーが切れてたんですね。それから、情報収集が厳しくなりました。仕方がないので、スマホの電波が届くところまで5キロぐらい車で走って行き、同じエリアにある系列の宿泊施設3館の状況を本部に報告していました。地震翌日の日中には、お客様も全てチェックアウトしていましたが、電気が復旧するまでは、1日2回の報告は電波が届くところまで車で10分ぐらい走ってやり取りしていました。



延泊の料金は「ちょうだいしない」と 社長判断 寮住まいのスタッフもホテルへ

40代 男性 宿泊施設支配人

9月5日の宿泊者数は300人弱で、そのうち6日まで連泊予定のお客様もいらっしゃいました。連泊の海外からのツアー客は、「せっかく来たので、とりあえず行ってみる」と、何ごともなかったように観光へ出かけて行きました。夕食時に話を聞くと「行きたいところは行けなかったけれど、景色を見て楽しんだ」とのことでした。

帰るすべがなく、2泊することになった団体客もありましたが、代金はいただきませんでした。その日のうちに、「やむをえない形で2泊以上に延びたお客様の代金は、ちょうだいしない」との社長判断が出されたからです。お客様からは、「この状況でよくやってくれた」という感謝の言葉をいただきました。

食材は、地震前日のうちに冷凍庫から冷蔵庫に移してあったのから使い、その後も、傷みの早いものから優先的に解凍するなどの工夫をし、バイキングではなく弁当形式で食事を提供していました。

従業員寮の電気もつかず、食事の支度もままならない状況でしたので、お客様の食事と同時に、働いている100人強の従業員、パート、派遣スタッフにも、食事を提供。希望する従業員には、宿泊施設の客室を使ってもらうことにしました。電話などで連絡が付かないので、幹部が分担して寮を回って、そのことを伝えました。

調理場は数日間、洗い物ができずにたまっていたので、復旧に何日かかるかと心配しましたが、調理場総動員で、洗い物と滅菌を一日でがんばって終わらせてくれたので、停電復旧の翌日から営業が再開出来ました。



特別支援学級の児童と「トランプしようね」と電話で安心伝える

40代 男性 小学校教員

私は、当時、特別支援学級の担任をしていました。地震の日、先進校の視察出張で東京に来ていましたが、学校へ連絡して状況を確認した後、保護者へ直接、電話をしました。特別支援学級の児童は、不測の事態が起きるとパニックを起こして、学校に来られなくなってしまうこともありますので。

何とか電話が繋がり、「すみません。今出張で東京にいますが、子ども達は心配してないですか？」と聞くと、「夜に揺れたので、ちょっと怖い、怖いと言っているんです」と保護者のお話でした。「ちょっと替わってもらえますか」と言って、児童に「先生だよ。大丈夫だよー。東京から帰ったらトランプしようね」と言葉を交わし、アニメの話などもして安心させるようにしました。

地震翌日の深夜に新千歳空港に帰ってくると、お土産屋さんの天井が崩落していたり、スプリンクラーの破損で水浸しだったりして、北海道を出た時とはまったく違っていて驚きました。

翌週、子ども達と学校で再会し、「怖かったけど大丈夫だったよ」、「ゲームをずっとやっていたんだ」とか、授業の時間を潰して1時間かけて話を聞き、「じゃあ、お勉強しますか」と日常に戻っていった感じです。

東京にいた時、北海道ではスーパーに牛乳やパンなどが無いと聞いていたので、学校に帰ってパンなどを配ることができるかもしれないと、食料で旅行鞆をパンパンにして学校に持って行ったのですが、そのまま家に持ち帰って食べることになりました。



パソコンが使えないとまったく仕事にならない

50代 男性 中学校事務職員

中学校の教頭先生から早朝に、停電のため臨時休校にするという電話がきました。臨時休校でも、職員は学校に行かないといけません。電気が復旧していなかったら何をしようかと思いながら、ラジオで情報収集しながら車で学校に行きました。

学校では、校舎を見回って被害状況を確認しましたが、停電でFAXも動かないし、パソコンも使えないためメールも使えません。教育委員会からの連絡も来ないので、まったく仕事になりませんでした。

このまま停電が続いて復旧しなかったら、9月下旬の学校祭をどうしようかという話もしましたが、パソコンが使えないため口で言うだけで、何もできませんでした。しばらくすると、役場の方が来て、避難所にするかもしれないということで、「避難所」という張り紙をしてマットも敷いて体育館を開放しましたが、結局は誰も来ませんでした。

パソコンが使えないと何もやることがないので、厚真町の知り合いに、2000年噴火の反省を踏まえて「記録写真を撮っておくといい」と、スマホで伝えたりしていました。



地震は期末試験中 延期の電話通じず LINEで伝言 先生がスクラム組んで対応

30代 女性 高等学校教員

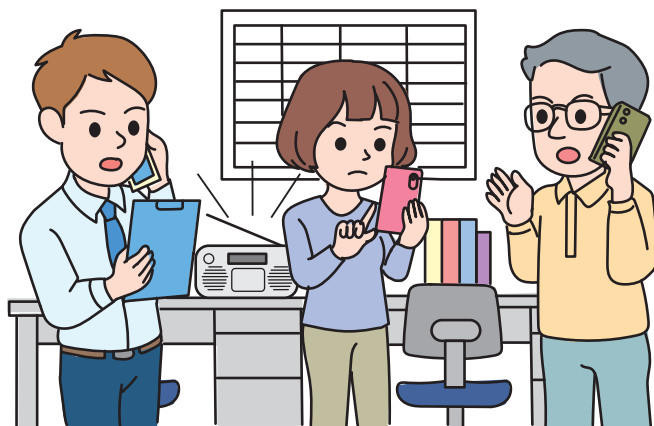
私は、徒歩3分で学校という教職員住宅に住んでいました。校長、教頭、事務長さんも同じ住宅で、朝、皆で集まって「大丈夫だった？」という話をしながら、学校へ行きました。教頭、事務長で学校の設備の点検をした後、教員が各自の持ち場を確認しました。私は理科室の担当だったので、薬品がこぼれたりしていないか、窓ガラスが割れていないかなどを確認しましたが、問題はありませんでした。

地震の3日前から地震の日までは、前期期末考査の期間でした。地震の影響で臨時休校として、テストの一部を翌週に延期を決めましたが、変更の連絡を回すのに、連絡網は電話でしたので苦労しました。電話が通じない家の生徒には、友だち同士のLINEで連絡先を知っている他の生徒に伝言を頼みました。

生徒からは、建物倒壊の報告はなかったですし、電気が止まったなどの生活の心配ぐらい。家にいなかった生徒の安否を心配して携帯にかけたら、「おばあちゃんの家に集合しています。無事です」と分かってホッとしました。

学校の規模が大きいので、日頃からの職員の連携はとれていました。教職員住宅では、発電機能をもつ車を持っている先生の車の電気を使い、炊飯器でご飯を炊き、お握りを作って、先生方に配るということもしていました。みんなでスクラムを組んで対応できたのは良かったです。

学校では、電話連絡網しかなかったことを反省し、地震後にメール配信サービスを使った連絡体制を作ることになりました。



復旧すると思い修学旅行のガイドコースを下見 教員仲間へ2000年噴火時のアドバイス

60代 男性 ガイド・元小学校教員

2000年の有珠山噴火の時には、被災した小学校で教員をしていて、いまは有珠山でガイドをしています。地震のあった日は、高校の修学旅行の防災学習でガイドをする予定でした。停電は程なく復旧するだろうと、早く起きてガイドコースを回って前日の大雨や地震で道が傷んでいないか確認して連絡したところ、「停電で行けません」という話で少しがっかりしました。

ガイドが中止になった後は、被害がひどかった地域の学校にいる元同僚に電話をして、家が壊れた児童はストレスを抱えている可能性があるので、校長に言って心理専門家と連絡が取れるようにするといったか、過去の噴火災害の経験からアドバイスを伝えました。当時有効だった、教員を臨時的に増やす加配教員についても必要性を伝え、短期的に実現することができました。



災害前の出前講座が役に立った

60代 男性 元住民自治協議会副会長

その年の4月に、1000年に一度程度の降雨を想定した新しい洪水ハザードマップが配られました。私たちの地区は毎年9月に防災訓練をやっていますが、そのハザードマップの見方が分からなかったのも、市の防災課に出前講座を依頼しました。

「1000年に一度だとピンとこない。100年に一度くらいのものが来たらどうすればいいのか」と聞いたところ、「防災マップの中の紫色の線が100年に1回のラインです。まずはこのラインから外に出てください」と言われました。

それが頭に残っていたんです。

土のうの準備の話が消防団からきて、「台風が本当に来るんだな。やばいな」と思い、避難先をどうするかについて考えました。山手の方の指定避難場所にみなが一斉に避難しようとするれば、道も混み、山の坂も上らなければいけない。特に弱者には厳しいだろうとなったとき、1000年に一度の雨でなければいいんじゃないかと、前の年まで避難場所であった、ハザードマップの紫色のラインのギリギリ外にある小学校への避難を本部の会議で提案。自治会長から小学校の教頭先生へ事情を説明してもらい、そこの体育館を避難場所として開けてもらうことができました。



浸水時、機能しなくなった固定電話

70代 男性 元住民自治協議会会長

全ての安否確認が終わったのが10月19日で、6日間もかかりました。安否確認に一番時間がかかったのは、川の下流で水が2m近く入ってしまった地区でした。緊急連絡網はあったのですが、固定電話の番号で登録されているものが多く、浸水によって固定電話は機能しなくなったため、連絡が取れなくなったことが原因でした。

そういう状況で、こういった形で安否確認をやったのかと言うと、警察の方、消防の方とローラー作戦をやり、最終的にはボランティアの方の情報などすべてを県の社会福祉協議会でまとめていくシステムに変えました。

この災害で、情報の共有化と安否確認が課題となりましたので、今後は自分がどこかへ行ったら災害対策本部や仲間へ自ら連絡を取ること。それから、例えばAさんに連絡を取る時は、親戚のここへも連絡すると分かりますよという情報を、地区ごとにまとめました。

今ではほとんどの人が、緊急連絡網に携帯番号を登録してくれていますので、安否確認もスムーズにいくのではないかなと思います。



根拠を示さないと避難してもらえない

60代 男性 元住民自治協議会副会長

私たちは河川事務所からの情報で、少なくとも越水はすることが分かっていたので、非常に危機感を持って、住民の皆さんへ逃げるように放送しました。そして、災害対策本部を夜の9時半に解散し、自分の家の近くまで戻って来たら、家々に電気が点いていて、住民の皆さんが家にいたんですよ。

てっきり小学校へ避難している人がいっぱいいると思っていたんですが、全然危機感が伝わっていなかった。マニュアルどおり緊急連絡網で逃げるように伝えたのだけど、「逃げろ!」と言っただけで、根拠を説明していなかった。ただ逃げろと言っても「なんでだい?」となってしまった。年寄は、「長く住んでいてそういったことは一度もなかったし、堤防も明るいうちは水が来ていなかったから大丈夫」と言っていた。

「河川事務所からの情報で、ほぼ何時間後に越水するから逃げてください」と根拠を示して伝えないと、住民の皆さんは動いてくれません。私が近所の10軒くらいの戸をドンドンと叩いて、そのように伝えたら、「ほんとかい!」ということで逃げた人がいました。「良く教えてくれた」という人もいました。一番大切なことは伝え方なんですね。



100回空振りでも、101回目は助かるように

60代 男性 元地区役員

長野市洪水ハザードマップでは、千曲川の川岸近くにびっしりと赤い丸がついています。これは「氾濫流による家屋倒壊等」の想定されるエリアなのです。今回の千曲川の決壊でも、建物が流されてしまって、土台しか残っていない地域でした。

家ごと流されてしまう危険がある場所は、垂直避難、つまり自宅の2階に残ってはいけないうです。警戒レベル4、避難指示が出た段階では、誰も残らないようにしなければいけません。

でも、残ってしまう人がいるんです。何十年もこの地に住んでいるお年寄りは、自分の家から離れるのをすごく嫌がります。

あの時、夜中の1時過ぎに消防団が避難を呼びかけるために、半鐘を鳴らし続けました。それでも2割ぐらいの方が逃げませんでした。

なぜ早くから逃げないといけないうのかを分かってもらいたいです。100回逃げて100回空振りでも、101回目に、「避難していて助かった」と言えれば良いのだから。



備えなければ憂いあり

60代 男性 元地区役員

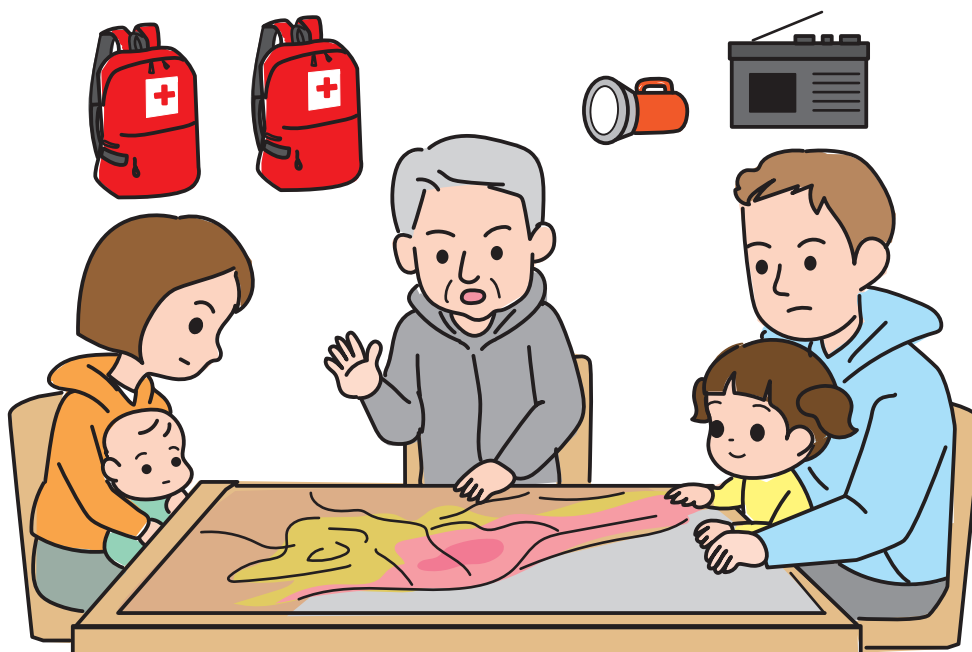
私は日頃から家族の中で、何かあった場合に避難する時には、安全な次女のアパートに一旦集合しよう。それから避難所へ移るか、そのままアパートにいて良いかどうかを判断しようというような話し合いをしていました。事前に家族の中で避難についての話ができていたのが大切だと思います。

住民自治協議会では、水害をきっかけに地区で活用できる「我が家の避難計画」と「マイ・タイムライン」を作成しました。地区全体の状況を把握しておくために、自分の逃げる場所を記入してもらい、携帯の連絡先も書いてもらうことにしました。

そして、避難した場合は、必ず区長さんなりに「〇〇に避難しました、無事です」と自分から連絡してもらうようになっています。

農家の人にとって農機具はとても大事なものですから、警戒レベルのどの段階でどこへ移動させるか。ペットを避難所へ連れていけるのか、行けない場合はどうするのか。子どもがいないから避難先はホテルにしようかといったことを普段から考えてもらうようにしました。

「備えあれば憂いなし」の逆で、「備えなければ憂いあり」なのです。



家の階段を上がってくる水に唖然

60代 男性 醸造場社長

防災無線等で頻繁に避難勧告が来ていたのですが、自分はその段階でも避難せずに、水位が上がってきたら食料がないと困るから握り飯とカップ麺を持って上がろうとか、水が押し寄せてきたらビデオを撮らなくちゃいけないとか、ライフジャケットも持っていこうなど、妙なところで可笑しいくらい冷静でした。

夜中の12時くらいから越水したのかサーっという音がし始め、3時過ぎからゴーっという音に変わり、4時になると階下のガラス窓が割れる音がして、『これは決壊したんだな』とわかりました。

その時には電源も落ちてしまって、周りの状況がよく分からなかったのですが、目視できる範囲では、1階の屋根の近くまで水が来ているような感じでした。

サーっという音がゴーっという音に変わった時、『これは現実の事なのか?』と。そして、薄暗い中、家の階段の上から7～8段目とだんだん水が上がってきた時に、初めて、とんでもない事が起きている、現実なのだと思いました。



夜を徹して作業してくれたボランティアさんに感謝

60代 男性 醸造場社長

被災から3日後か4日後、変わり果てた地域を、長靴の丈ぎりぎりの泥の中を歩いて、道に倒れ掛かっている電信柱を避けながら、自分の家にたどり着きました。醸造場の形はほとんどなく、機械や仕込んだタンクや原料も何もない状態で、素直に受け入れることができないほどの悲惨な光景でした。

最初に家の目の前にあったガレキの撤去を重機ボランティアさんが始めてくれて、工場の中に入れる道を作ってくれました。これは人間の身体で言えば、血管の詰まっているところを取り除いて、少しずつ全体に血液を巡らせていくような感じでした。知人や友人のボランティアさんには、溜まっている泥を出す作業を積極的にしてもらいました。

最初は道の隅に泥などを出していたのですが、地域全体で連日作業をしているので、だんだんと辺り一面がゴミでいっぱいになっていきました。そんな中で地域のゴミ置き場を用意して、日中はボランティアの方々がそこにゴミを運び、夜中に自衛隊さんがそのゴミをもっと大きなゴミ置き場に移動させてくれました。それを連日繰り返して、なんとか地域のゴミや泥を片付けることができたのです。しかし、私たちは、夜中はくたびれてぐっすり寝てしまっていたため、しばらくはそのような取組が行われていることに気がつきませんでした。

ボランティアさんなど支援をしてくれた方々には感謝しかありません。



在宅避難の方への支援の遅れ

70代 女性 ボランティア

かなり昔から言われていたと思いますが、今回の災害でも、在宅避難をしている方へのサービスが行き届かないところがありました。

被災した翌日、ご飯がないので避難所へ行ったら、「ここは避難所優先で配るから」と応じてもらえませんでした。その後しばらくして、ご飯をもらえるようになったんですが、私が5軒分のご飯をもらおうとすると、「一軒ずつ来てください」と言われました。誰かがまとめてもらってきてくれれば、その間、行かない人は片付け作業もできるわけです。人を信用してくれていないのかなと、ちょっぴり寂しい気持ちがしました。

それから、在宅の方には情報も入らないのです。避難所に行けば、タダで入れてくれる温泉があるよとか、どここの旅館に泊まれるよとか、何々のサービス券が配布されましたとかの知らせが手に入るのですが、在宅の人にはそういう情報がなかなか来ないのです。そこで私は、避難所にあるチラシをコンビニでコピーして、家で避難生活をしている方に配布するということもやっていました。



ピンクの伸びた腹巻 ～支援ゴミ～

70代 女性 ボランティア

支援物資として、企業さんから送っていただいた衣類は全て新品でしたが、ご厚意で送ってくださる衣類の中には、使い古したようなものがかなり含まれていました。例えば、「ピンクの伸びた腹巻」。腹巻なのですが、毛玉がたくさんくっついていて、伸びていて、誰も使いたがらないよねというもの。それに近い衣類が、トラック何台分も送られて来て、処理に困りました。

途中からは、「中古のものでも良いのですが、あなたが着たいと思うものや、新品に限らせてください」と言うようにしました。

中には、「何でもよいからくれてやれ」みたいな人もいますよね。被災者は、品物と一緒に「思い」を受け取っているわけで、汚いものとか、こんなの使えないよねというのを見ると、「そう扱われている」という「思い」が伝わってきて嫌な気持ちになりました。

最終的に、誰も持っていけないものは、「支援ゴミ」になってしまいます。



避難所の中に子ども達の居場所をつくる

70代 女性 ボランティア

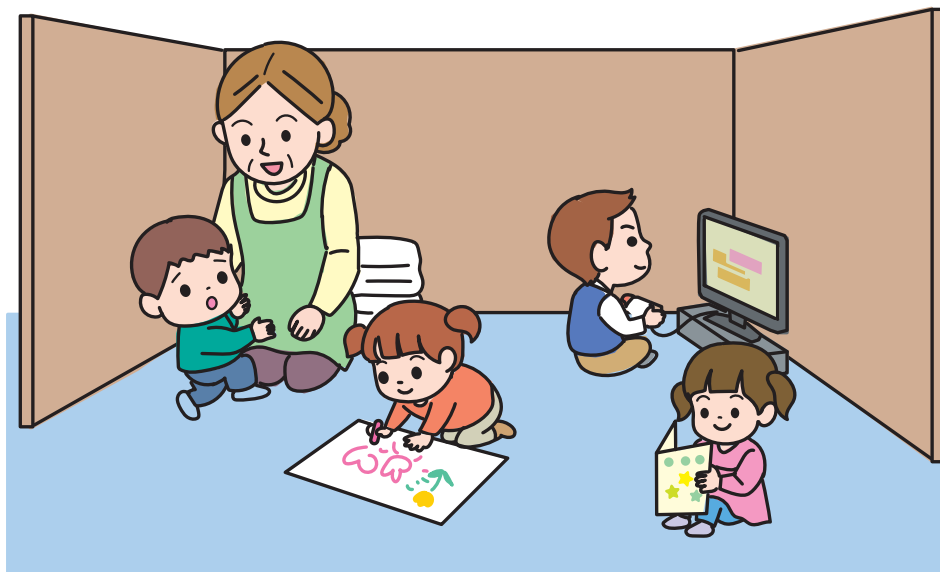
私は拠点型子育て支援施設を運営しています。被災後、職場に来て最初に思ったのは「今、子ども達はどうしているんだろう」ということでした。

避難所の中に子ども達が安心して過ごせる居場所があれば、保護者の方も自宅の片付け作業に専念できるのではと思い、避難所に入って子どもの一時預かり等の支援をすることにしました。

子ども同士で、「僕、ランドセル流しちゃった」、「そうか、僕は2階に上げておいて良かったよ」、「うちは車の中で生活しているんだ」とか話しているのを聞きながら、私達スタッフはそれに対して質問したりせずに、「そうだったんだね」と心の中で思いながら対応していきました。

避難所が閉鎖されてからも、公民館などでの一時預かりを継続したほか、親は家を再建するのに一生懸命で子ども達を遊びに連れて出られなかったりするので、夏は山に行ったり、冬は善光寺の宿坊に泊まったりといったリフレッシュプログラムを実施しました。

保護者の方からは、「子どもは雨が降ると、とても怖がっています」というような話と共に、「避難所での生活が楽しかったと言っていますよ」という声をいただきました。



災害廃棄物の山が消え、地域の景色が変わる

40代 男性 社会福祉協議会職員

私が災害ボランティアセンターの運営を担当した長野市北部エリアは、被災後、狭い道路の両脇に泥が置かれ、災害廃棄物が地域を埋めつくし、絶望的な景色でした。

住民の皆さんが前を向いていくきっかけは、11月の3連休だったと思います。人口2,000人のその地区に、3,000人以上のボランティアさんが入ってくれました。ゴミの運搬に使える軽トラックで駆けつけたボランティアさんもたくさんいました。

災害廃棄物の山が消えていくんですね。

ボランティアの大集団が一日の活動を終えて帰っていくところに、ちょうど西日が差し込んでいて、瞬間、地域の空気が変わったように感じました。

住民の皆さんには、不安とか焦りとか、復旧がなかなか進まないことへの怒りがすごかった部分もありました。でも、地域の景色が変わり、そこから、ボランティアさんへの感謝の言葉とともに、「希望の光が差して来た」といった言葉が出てきたのです。



もう1度りんごをつくろう

40代 男性 社会福祉協議会職員

長沼地区は、信州りんごの発祥の地です。そのりんご畑も泥が30cmくらい堆積しました。ボランティアさんの力で自宅の片付けが進むと、農家さんから「畑の泥をなんとかできないか」という声があがってきました。木の根が腐ってしまうことを恐れていたんです。

緊急的な対応として、りんごの根が呼吸できるよう、木の周りの泥を除ける必要がありました。それをボランティアさんの力でやっ払い、『農業ボランティア』がスタートしました。

それから1ヶ月くらいで、地区のほとんどの畑の泥出しができました。これには農家さんもびっくり。あの悲惨な光景を目の当たりにして、りんごづくりを辞めようと思った人が、もう1度りんごをつくろうという気持ちになれたようです。ボランティアさんから「来年、りんごを買いに来ますんで」と言われたら、励みにもなりますよね。

また、長野では『農福連携』が行われています。災害復旧事業を障害者就労支援事業所が受注し、障害のある方が一生懸命、畑を片付けたのです。その仕事ぶりを見て、「ぜひ来年もお願いできないか」と言う農家さんの声も聞かれました。

これらの取組は、今後、他の被災地でも展開の可能性があるのでと感じています。



機能したボランティアのコミュニティマッチング

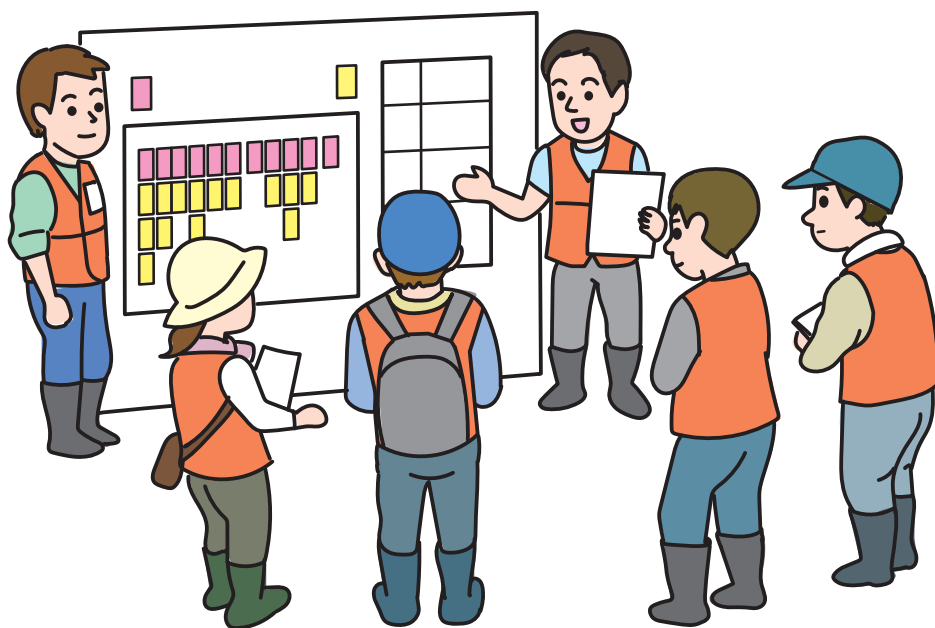
40代 男性 社会福祉協議会職員

イメージされがちな災害ボランティアセンターは、受付があって、ボランティアさんが来て、被災者ニーズとマッチングして、送り出して、という形ですが、今回はとても多くのボランティアさんがいらして、スムーズな運営ができませんでした。災害ボランティアセンターの運営マニュアルがありましたが、そこまで大規模な被災は想定していませんでした。

区長さんたちが住民のニーズを把握し、どこの家にボランティアさんを入れなきゃと分かっていたので、個人個人のマッチングではなく、区長さんと一緒に、区単位でボランティアさんのマッチングをしていきました。区単位で30人、50人ずつ送るといったやり方です。

このように、コミュニティマッチングをしていったというのが、今回の災害対応の大きな特徴だったと思います。区全体が全壊した地区では、多様なニーズを断らず、全部受け止めて、多くのボランティアさんに活動してもらいました。

住民の想いは、「ボランティアって何してくれるの?」から、「ボランティアってすごい、ありがとう!」へと変わっていきました。そこは大きかったと思います。



垂直避難で苦労

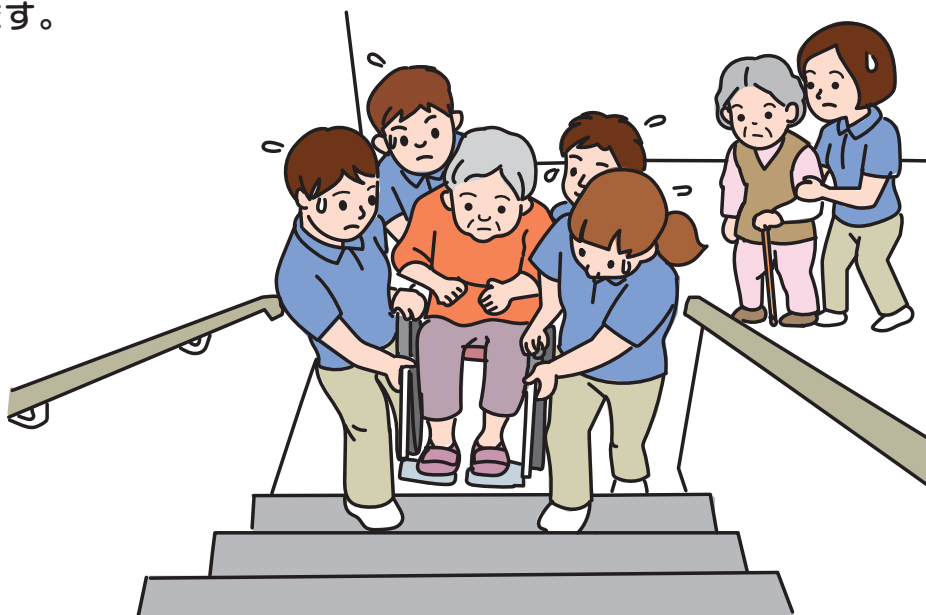
50代 女性 福祉施設職員

私は特別養護老人ホームで、いわゆる垂直避難の指揮をとっていました。見たことのない警報が出たので、1階の利用者さんをまず2階に避難させました。その後停電が起き、いよいよ施設に水が入ってきたので、90名の利用者さんを2階から3階へ「行くよ!せーのっ」と声をかけ合って運びました。自力で歩ける方はほとんどいません。寝たきりの方も多く、そういった方はおんぶができないので、車いすごと運びました。

ベッド自体を運ぶことはできなかったなので、はずしたマットレスを硬い床の上に敷き詰め、ざこねをしていただきました。本来は男性と女性を分けるのですが、仕切りすらなくて、利用者の方には申し訳なかったです。

垂直避難が終わった時、1階に家や車の鍵、財布を置いていることに気がつきました。「取りに行かなきゃ」と思い、3階から2階に降りて、階段のドアを開けると、2階の床近くまで水が来ていました。「ああ、こんな状況だったんだ」と初めて知りました。外を見ている余裕は全然なかったのです。

今となっては、エレベーターが使えた早いうちに、3階までベッドごと皆さんを避難させていれば、あの大変な階段移動はなかったなと思います。



水害に遭うと、すべて廃棄

60代 男性 元病院事務長

11日から事業所内で管理職を集めて、台風19号向けに対策会議を行いました。とにかく備えを万全にしようと、停電になることを想定し、あらかじめ発電機にガソリンを入れておこうとか、非常用のランタンや防災セットを2階に上げておこうといった話をしました。

今まで何回か水害に遭っている地域で、直近は十数年前に、膝ぐらいまで水が来たということは知っていました。そのため、水が来ても膝ぐらいかなと思っていて、1階の倉庫に入っていた非常食は、これくらいなら大丈夫だろうと、机の高さの上ぐらいまで移動しました。

ところが、結局1階は全部が水に浸かってしまい、使い物にならなくなってしまいました。また、車椅子、ステンレスの棚、厨房の棚なども下水と一緒にたまった水に浸かってしまい、洗って使おうかとも思いましたが、においも相当きつくてあきらめました。

医療施設・介護施設ですので、衛生面も考えて全部捨てました。訪問介護に使っていた軽自動車も、機械室や高圧受電設備も、水害に遭うと何から何まで使えなくなってしまうんだなと思いました。



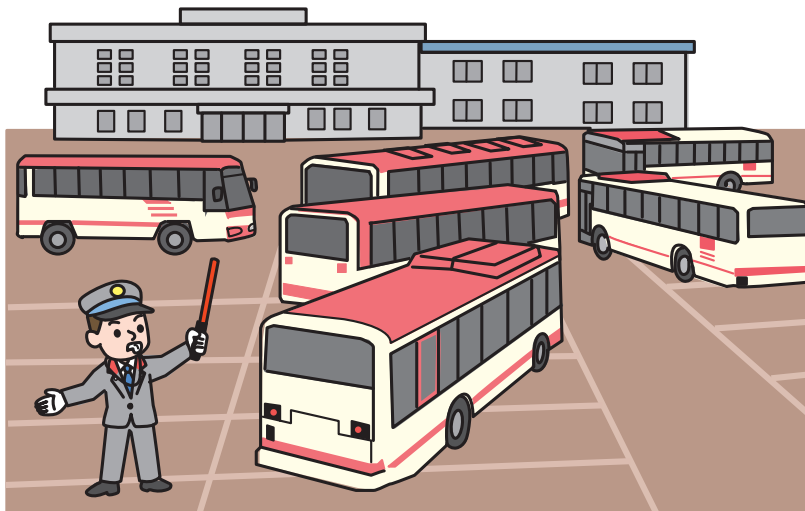
車両を守って地域の交通を守る

50代 男性 バス会社取締役

前日から営業所に泊まり、台風対応をしていました。早朝、建物の外に出ますと営業所の入口の方から水が来ている感じがしたので見に行くと、まずい状況であることがわかりました。

我々はバスがないと仕事になりません。車両を守るということは、何があっても最初に考えなければならない、バス会社のDNAとして染みついていたのではないかと思います。バスがまだ動かせる間に全てのバスを動かすよう努力し、高台の須坂駅前と長野運輸支局の敷地に100台のバスを避難させました。長野運輸支局には一先ず「数台置かせてください」と電話で確認を取りました。その時は数台と表現はしましたが、私は全部のバスを持っていくつもりでした。出勤していた運転士だけでなく、近所に住んでいる非番の運転士にも来てもらい、バスの避難先まで、行きは運転士の人数分のバスをそれぞれ運転してもらい、帰りは1台のバスに全ての運転士が乗り込んで営業所まで戻ってくるという方法を数回繰り返しました。

昭和57年、長野市北部で千曲川の支流、樽川が決壊した時、バスの一部が水に浸かってしまった苦い経験が受け継がれていたこと、また、空振りになっても良いという早めの判断が功を奏したと思います。2日後には運転を再開でき、お客様から直接「大変だったね」と声を掛けられました。公共交通として早く復旧できただけでなく、自衛隊が救助した避難者の輸送にも協力を頼まれ、応えることができました。



お客様に運休情報を伝えるのに一苦労

50代 男性 バス会社社員

午前4時頃にバスの運休を決定したのですが、その直後に停電になりました。電気がないと何も稼働できません。会社の近くのコンビニまで走り、NHKに長野市内のバスが本日運休だということを流して欲しいとFAXでお願いしました。

長野駅周辺のバス停では、運休を知らせる張り紙をしたのですが、市の中心部は市内で災害が起きているという雰囲気はなく、台風が過ぎた朝の静かな状況でした。私が家を出た時間は、駅前のバス案内所も開いていない時間でしたので、自宅のパソコンで運休を知らせる張り紙を作り、データを持ち出し、市内にもう一社あるバス会社の案内所で印刷をさせていただきました。今思えば、「運休」と書いたものを常時、用意しておけば良かったです。また、停電によりインターネットでお客様に運休を知らせる手段を失ってしまったので、被災した営業所以外からも情報を流せるように普段から準備をしておけば良かったと思いました。



自動ドアの鍵が開けられない

40代 男性 製造業代表取締役

事業所が水没した翌日、やっと水が引き、工場に入ってます驚いたのは被害の大きさです。辺り一面水だらけ、泥だらけで、頭が真っ白になりました。周りにはリンゴ畑や田んぼがあって、10月は、稲刈りが終わって稲を干したり、リンゴ畑のリンゴが赤くなってきたりする時期ですが、そういった農作物が私たちの敷地内に大量に流れ込んでいて、農家さんも大変な思いをしているだろうなと思いました。

皆で建物の中に入ろうとしましたが、停電していたため、自動ドアは動きません。当然手動で開けるしかないのですが、細かい砂が大量に鍵の穴に入り込んだようで、鍵が入らず苦労しました。

また、水害の場合、水に浸からなかった建物の2階部分はなんともないと思われがちなのですが、意外にも、上水道は来ても、下水道が使えなかったのもので、復旧作業は最初まなりませんでした。トイレが使えない状態では、大勢の社員が出社しても困るだろうと考え、まずは少人数で出社して、仮設トイレの設置など、必要な最低限のインフラを整えながら、徐々に出社する社員の数を増やしていきました。

何をするにも、電気がないと始まりません。電気の有難さが身に染みました。



データ管理は、事業継続のポイント

30代 男性 製造業社員

建物の1階部分は水没してしまったのですが、経理や財務を担当する管理本部がある2階事務所は無事でした。会社を経営していく上で必要な書類が一切被災しなかったのは助かりました。それが、復旧が早かった一つの要因です。

一方で、1階に生産管理の機能を置いていたことで、サーバーも書類も図面も全て被災しました。

被災をしてわかったことは、もっと2階に重要なものを上げておく、生産設備は物理的に被害を受けない方法を取っておくべき、ということでした。

「長野は台風災害を受けないだろう」という心のゆるみがなければ、クラウド上に重要書類を置いておく、できるだけデータのバックアップを取っておく、などの対策を打っていたのではないかなと思います。そうすることが、会社に来なくても、自宅や色々な場所から業務ができ、お客さんとのやり取りや生産管理を行えるといったより良い業務環境づくりにも繋がっていたかもしれません。



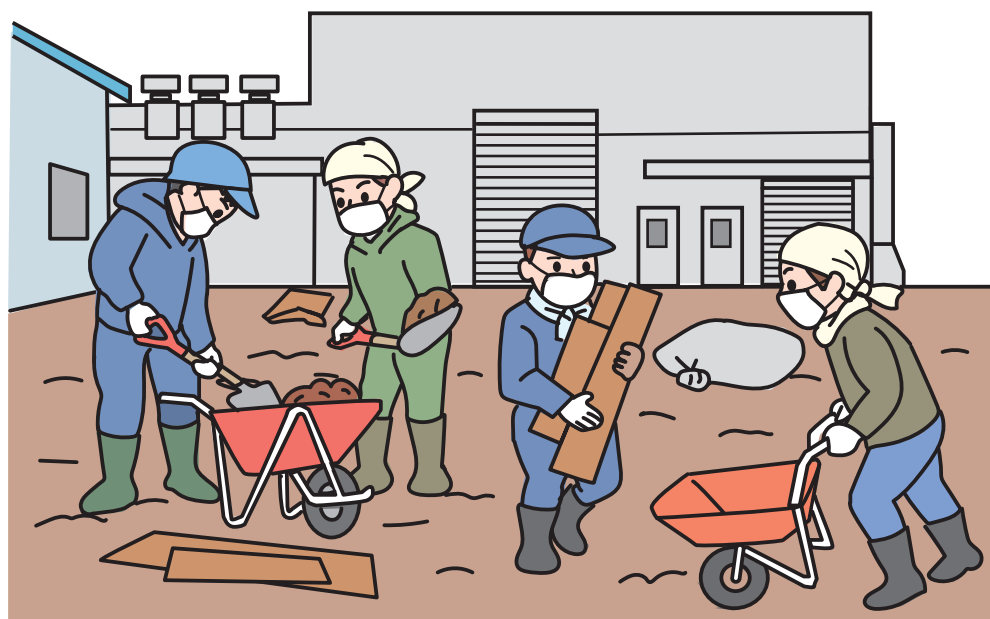
「会社は大丈夫なの?」という不安を解消

50代 男性 製造業取締役

会社は、浸水のため生産機能が完全にストップしてしまいましたが、社員たちは休むことなく、泥だしや洗浄などの復旧作業に携わりました。社員は皆、頑張ってくれていましたが、被災から2週間くらい経過した時、「会社は大丈夫なのか?」という声が出てきました。

普段から月一回、工場の全員を集め、会社の経営状況などを社長が話す全体集会を開いていましたが、被災から3週間後に、臨時の全体集会を開き、「雇用は必ず維持するので、泥だらけになっても頑張ってくれ」と社長から激励しました。それから不安の声はなくなりましたが、今思えば、もう少し早めに全体集会を開いておけば良かったと社長は言っていました。

結果的に、被災後に会社を辞めた社員は1名も出ませんでした。翌年1月には緊急対策本部を立ち上げたホテルでまた新年会を開催でき、みんなで大変盛り上がりました。被災を契機に社員が一丸となった思い出深い経験です。



編集後記

一日前プロジェクト、 みんなでやってみませんか？

一日前プロジェクトの物語をお読みいただき、いかがでしたでしょうか。皆さんも、難しく考えずに一日前プロジェクトを実施してみませんか？

自然災害に遭遇して体験したことや感じたことなどを語り継ぐことは、災害体験者や被災者の重要な使命であると言えるでしょう。なぜなら、多くの市民は被災経験や災害体験を持たないため、災害に事前に備えることの大切さを頭で理解はしていても、実際に自分が被災したらどうなるかをイメージできず、何も対策を講じていないからです。

災害体験や経験を話したい、語り継ぎたい、語り継がなければならないと思っている方々も、実は大勢いらっしゃると思います。その方法が見つからず、語り継ぐこと・発信することがなかなかできないまま、貴重な体験が風化してしまうことが多々ありますが、ここでご紹介する一日前プロジェクトの手法を用いれば、比較的気楽に「語り継ぎ」を実現できます。

一日前プロジェクトでは、被災された方々のさまざまな「思い」や「本音」を物語にして、災害体験・被災体験を持たない人たちに、災害が身近で、恐ろしいものであることに気づいてもらうことを本来の目的としています。今年度も、ジャーナリストの皆さんや地域の防災に携わっている方々と一緒に物語作りを行いました。今後も本プロジェクトを進めるにあたり、新たな担い手が増えることが期待されます。

一日前プロジェクトで作られた物語は、研修やワークショップなどの際に、災害のイメージを膨らますために、導入部として使うこともできます。文字だけでなく、添えられている気の利いたイラストも一緒に使うとより効果的でしょう。テレビニュースの企画で、過去の被災者インタビューの代わりに一日前プロジェクトの物語が使われたこともありますし、ホームページでエピソードを紹介している自治体もあります。

一日前プロジェクトの進め方や活用方法のポイントを以下にまとめましたので、参考にしてください。

※詳しくは、内閣府のホームページ

<https://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/ichinitimae/index.html> をご参照ください

物語を集める

一日前プロジェクトの素材となる

物語を集める時のポイントは次のとおりです。

1. 「物語」を拾い出す

(1) 話を聞く

同じ被災体験のある人同士に2～4人集まっていたいて、2時間程度話を聞きます。何らかの共通性がある方々のほうが、互いに思い出して再発見しながら話が進みますので、その過程も丁寧に聞き取りましょう。聞き手は複数で行い、質問して詳しく引き出すより、話が弾むように仕向け、疑問点は最後に確認すれば良いでしょう。最近の出来事だけでなく、時間がたった災害についても振り返って取り上げることもできます。

(2) 物語を見つけ出す

話を聞き終わったら、聞き手同士で手元のメモを確認しながら、災害を体験していない人にも共感を得られる物語になりそうな話を見つけ出します。1回の聞き取りで10話以上の物語ができることもあります。キーワードなどから、仮の見出しを考えておくといいでしょう。ただ、減災や防災行動としてふさわしくない話に気をつけましょう。

(3) 見出しをつけて編集する

テープ起しなどの記録ができあがったら、上記(2)で拾い出した物語の種を、できるだけ語り口を残して編集します。一つの物語ごとに300字から500字程度にまとめると読みやすいでしょう。一つの話題から複数の物語に展開することはよくありますので、単純に元の話を持ち分けるのではなく、重なっても単独の物語で流れが分かるようにします。

新聞や週刊誌、広告の見出しのように、内容を一言で言い表して興味を持ってもらえるような見出しを考えながら物語をまとめると、いいでしょう。内容を全部説明するような見出しではなく、「どんな話だろう?」と読んでもらえるきっかけになるように工夫しましょう。この見出し付けが、一日前プロジェクトの核とも言えます。

2. 物語を拾い出す場を作る

これまで、一日前プロジェクトのコンセプトを生み出した『災害被害を軽減する国民運動に関する専門調査会』の専門委員を中心に、各地で物語を探す聞き取りを実施してきました。その後、いろんな立場の人が、身近に感じられるような物語を拾い出すために、聞き取りの場をさらに増やそうと、聞き取りの担い手を増やす試みも進めてきたところです。さらに、今年度は、新型コロナウイルス感染症の状況にかんがみ、初めて聞き取りをビデオ会議方式で実施しました。

災害列島である日本では、不幸なことに毎年のように災害が発生します。その体験は、同じように見えても、一人一人にとっては厳しい経験です。その過程で辛い思いをした被災した人々の声を、一日前プロジェクトとして継続的に後世に伝えていくために、物語を聞き取る場を作り続けていきましょう。

一日前プロジェクト みんなでやってみよう!

----- 簡単な手順を紹介します -----

まず、過去の自然災害(地震、水害)の中から対象を選ぶ

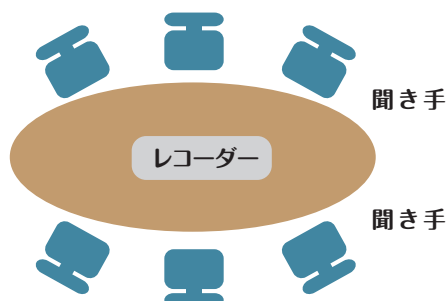
その災害の被災経験者や災害対応経験者に声をかける

みんなが集う場所と時間を設定する

※所要時間は2時間

なごやかな雰囲気の中で、当時を思い出しながら、体験したり感じたことを話し合ってもらおう

※話し手は、2~4人が適当



「教訓」や「知恵」につながる部分を拾い出し、タイトルをつける

テープ起しなどを基に、拾い出した部分を物語にする

※物語は、300~500字程度で、できるだけ切り口を残して編集

※物語の情景をあらわすイラストや写真等を添えると効果的

作成した「物語」を地域や職場のみんなに読んでもらう

気づき

共感

反省

「一日前プロジェクト」とは、地震や水害などの自然災害で被災した方や災害対応の経験をもつみなさまにお集りいただいて、

- 被災前後の行動
- 体験を通じて上手くいったと思うこと、失敗したと思うこと
- もう一度災害が発生したならば、次はどのように行動したいか
- そのために日頃から何を準備しておけばよかったか

といった本音の話をお聞かせいただき、これらの話から導き出されるさまざまな教訓や身につまされる体験をショートストーリー(エピソード)に取りまとめるという活動です。

こうして取りまとめたエピソードを広く活用・普及させることで、地域のコミュニティや国民一人ひとりに、防災・減災への関心や意識を高めていただくことを目的としています。

ここで紹介する物語は、ほんの一部です。一日前プロジェクトから生まれた物語は、内閣府の「災害被害を軽減する国民運動のページ」<https://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/ichinitimae/index.html>に掲載されています。ぜひ、アクセスしてみてください!きっと、あなたの心を動かす物語が見つかるはずです。

■一日前プロジェクトの物語・イラストは、非営利の目的であれば、広報誌やパンフレットなどで自由にお使いいただけます。「災害被害を軽減する国民運動のページ」(<https://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/>)からダウンロードしてください。



発行 内閣府(防災担当)

〒100-8914 東京都千代田区永田町1-6-1(中央合同庁舎8号館)

TEL 03-5253-2111 URL <https://www.bousai.go.jp>

